

第 47 回衆議院議員総選挙を振り返って

第 47 回衆議院議員総選挙の結果は予想通り自民・公明の政府与党勝利で終わった。では、民主党は惨敗したのかというとそうでもない。海江田党首が比例復活もならず落選という選挙前に危惧されていた「もしかしたら」の事態に陥ったとはいえ、11 議席増の 73 議席で「そこそこの数字」。大幅減が予想された維新は、わずか 1 議席減の 41 議席を確保し「予想を覆す善戦」。毎回「消滅」が危惧された社民党は現有 2 議席を死守して何とか「生き残り」、共産党は改選前の 3 倍近くに迫る 21 議席を獲得して「大勝利」である。野党はそこそこ善戦したのである。ではいったいどこが負けたのか？ それは、改選前の 19 議席から 2 議席までに落ち込み、社民党と同数となってしまいう大敗北を喫した「次世代の党」に他ならない。

今回の選挙で次世代の党が唯一の敗者となったことをどう解釈すればいいのだろうか？ 端的に言えば「自民党より右」を標榜し、憲法 9 条の改正を推進し、外交安保政策でタカ派色の濃い政党に対し有権者がノーと言った、ということではないかと思う。有権者が出した答えは、「安倍政権を積極的に支持はしないが、強く否定もしない。でもあんまり過激なのは駄目。アベノミクスもはっきりしないけど、もうしばらくやってみては」という事ではないかと思う。

私が気になるのが今回の投票率だ。小選挙区は戦後最低だった前回 2012 年の 59.32% を 6.6 ポイントも下回る 52.66%。比例区も前回は 6.66 ポイント下回る 52.65% だった。これは、20 代、30 代の若者の多くが棄権した結果だ。しかし、私はこの低さを嘆いているわけではない。その背後にあるものに思いをいたすべきと思っている。

私の周りには若者のなかには超タカ派的考えの人がいる。今回東京 12 区から出馬した田母神俊雄元航空幕僚長の考え方に賛同する若者は少なくないのではと感じる。最近では選挙が終わるたびに、若者層の投票率アップを図るため現状より簡単に投票できるネットシステムの構想が毎回話題となる。だが私は、今の日本で簡単に投票できるシステムの構築が必要なのだろうか疑問に思っている。単に投票率を上げるだけのシステムを導入することにある種の恐れを抱いていると言い換えてもよい。

日本が米国と戦争をしたことすら知らない若者がいる時代である。簡単に選挙ができるシステムが構築されると、他国の文化や歴史を慮(おもんばか)ることのない偏狭なナショナリズムを声高に叫ぶ政党や候補者に、軽いノリで賛同する若者がどっと投票することになりはしないかと恐れるのである。

内田樹が「街場の戦争論」で述べているように、先の戦争で日本は「敗北の検証が自力ではできないくらい」徹底的な敗戦を喫した。そして、その検証は戦後 70 年になる現在でも依然としてなされていない。

若者の多くはこの国の経済だけではなく、年金、医療、福祉のいずれにも希望を見出せていない。それが、政治への無関心につながっている。無関心の度合いは彼らの投票率をみれば明らかだろう。簡単に投票できるネット選挙の導入で政治に無関心な若者がゲーム感覚で投票する事態となれば、その結果はどのようなものになるのだろうか？

投票率の低さを嘆き、投票率をアップするシステム構築を語る前に、若者に未来の希望を与えることが我々政治家の取り組むべき問題だと、改めて自戒させる選挙結果だったと私は思う。

静岡県議会議員

天の一